



協業とは!!

DAS KAPITAL

8月学習会へのご案内 第30回「資本論を読む会」は

日時：2021年8月31日（火）
午後6時30分からオンラインで
「第11章 協業」の討論(続き)をやります。
(岩波文庫(二)262P) からです

7月29日(木)の第29回「資本論を読む会」は、皆さん夏バテもあるのかな、9名での学習となりました。初参加もお一人ありました。「第10章相対的剰余価値の概念」の途中、242ページから報告・討論を経て、「第11章 協業」に入りましたが、これも時間の関係で261ページまでに。次回にこの続きをやります。「第12章 分業と工場制手工業」にも入れると思います。

協業は「相対的剰余価値生産の特殊な生産方法」(p247)。生産力増大というとすぐ機械化！-となりますが、もっとも原始的？基本的な生産力増大システムですか

ら、みんなが知ってて、イメージできて、具体的で分かりやすく「資本主義生産の出発点」です。難解な概念議論はなかったようにおもいます。

学習の後の自主懇親会では、本多議員の辞職問題、コロナと五輪などの酒談義が続きました。次回もリモートで、開催時間は6時30分からです。終了後、自主参加の懇親会もやります。

初参加の方を歓迎！ご連絡をお待ちしています。気軽に参加して下さい。

☆「資本論を読む会」のこれまでの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.cocacn.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

パスワードは不要で閲覧できます。

レポーターから --Tak

第四編 相対的剰余価値の生産

第十章 相対的剰余価値の概念

※242P10L～

特別剰余価値も、必要労働時間の短縮に応じた剰余労働の延長から生ずる。

この「例外的生産力(生産手段による)」の労働は、「強められた労働」として作用し、同一労働時間内に、「社会的平均労働よりも高い価値を創造」する。

相対的剰余価値生産において資本が全体的に行うことを、かれは個別に行う。より低廉に生産される「個別的価値」と「社会的価値」との差の消失とともに、特別剰余価値も消失する。

この競争の全過程で、一般的(全産業)剰余価値率が影響を受けるのは、労働の生産力の増大が、「必要生活手段(個人消費)の生産産業＝第2部類」で生じた場合にのみ起こることとなる。

商品や労働力価値は「労働の生産力」に反比例し、相対的剰余価値は正比例するので、商品・労働者の低廉化のために「労働の生産力」を高めることは、資本の「内在的衝動」・不断の傾向である。

資本は商品の絶対的価値はどうでもよく「実現する剰余価値のみ」に関心があるので、労働の生産力の発展で、相対的剰余価値は「正比例して増大」し、商品価値は「反比例して低下」する。

労働の生産力の発展による「労働の節約」は、資本主義では、決して「労働日の短縮」を目的としない。逆に、「労働日の延長」、以前よりも大量の使用価値の生産へと作用する。それは資本への無償労働・剰余労働部分を延長するために他ならない。

★参考:「個別的価値」と「社会的価値」の差である「特別剰余価値」

・マルクスは、特別剰余価値は「強められた労働」が、「創造」している、と記述している。

？特別剰余価値は、生産過程で「生産・追加」された「価値量」なのか？

※向坂：生産過程では逆に、個別生産物は「少ない価値」の生産だが、「流過程・市場で成立する社会的価値」により、「劣悪な生産条件・多くの価値」の資本と相殺・平均化され、

「自身は生産していない特別な価値」を得る。だから「創造」してるのではなく、流通・市場の結果、「創造したように見える」と理解すべき。＝マルクスの記述が「不正確」？

※宇野：生産過程で実際に「生産・創造」され、流過程でそのとおり「実現」する。だがそれは、この先進的個別資本の「社会的平均より少ない価値」に、生産過程で「何か」が付加され「実際に強められる」結果である。この追加される「何か」を「生産力増進に対して社会が支払う価値」として理解しようとする。＝マルクスの「言葉通り」。だが、規定不明の「社会が付与する価値」という、マルクスにない概念で労働価値説を「二元論化」する。

★243p後4Lの、「より低廉に生産される商品の個別的価値」・両価値の「差の消失」、という記述から向坂説であることは明瞭と思うが、大きな論争点。(マルクスの表現不備?)